# ダリア　インペリアリスとの出会い

造園家　田中　哲（あきら）
（日本ダリア会理事）

## いざグアテマラ

私のインペリアリスとの出会いは、グアテマラ共和国との出会いに始まった。１９９６年親友、松本　真吾さん(以後、松本とする。)のグアテマラ移住がきっかけで、１９９８年４月、グアテマラの地を踏んだ。造園業の修行の身で、時間もお金も無かった私にとって、この年の春の長雨は、神様から与えられた奇跡の時間であった。子供の頃より動植物が好きで、アマゾンなどジャングルへの憧れが強かった私に、松本は、お前に最高のフィールドがあるから、夢を叶えに来い！と暖かい手紙を何度もよこし、帰国時には、成田から帰る道々、色々な土産話とアドバイスをくれた。そんな募る思いが爆発し、週間天気予報の雨マークを手に、ドキドキしながら、親方のもとに。辞表を提出するような心境で週間天気予報と、思いを語った。次いで旅行会社で格安航空券を手に入れ、２日後には、グアテマラの地を踏んでいた。空港に着くなり、荷物が出てこない、（二度目も、航空会社のミスで出てこなかった)。しかし今となっては、そんなことはどうでもよい、パンツは、松本に借りよう！グアテマラの香りを胸いっぱい吸い込み、夢心地で、親友達との再会を果たした。

## 冬枯れの景色とアンティグア

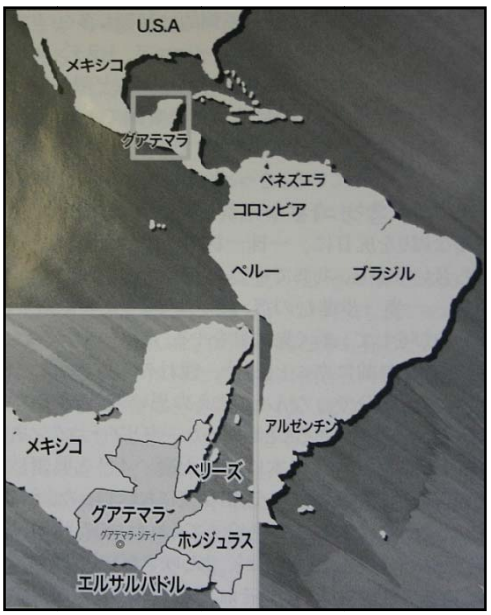
空港のハンバーガー屋で、コーヒーをすすり、早々に、安全とは言えぬ首都グアテマラシティーを後にする。サムライ（地元での、スズキ・ジムニーの愛称）のボロエンジンの響きは、町並みに、ゆっくりと流れる時間とうまく調和しながら、我々を重たそうに運ぶ、周りの車達も、あたりまえのように、ワイパーやウィンカーが無い。しかし、明るい顔で　生活と向き合う人々の姿は、とても愉快で暖かい。大きな、ショッピングモールなどが並ぶ通りは､アメリカの匂いがするが､そんな町並みも 20 分ほどで無くなり、富士山に似た山々が少しずつ近づいてくる。しだいに生活の匂いが薄まり、森が現れた、しかしそこに見たものは、冬枯れた景色で、日本でも良く見るようなそれである。落葉樹の雑木に、松やビャクシンのような、針葉樹や、常緑の低木が混じる。下草は皆枯れ、イネ科の植物が解る程度で、何があったのか、車上からでは、さっぱり解らない。時々リュウゼツランなどが、崖や木々の間にあり　変な組み合わせだ。少々、落胆ぎみで、ジャングルは・・・と尋ねると、松本がサングラスに笑みを浮かべながら､「アキラ、明日行くぞ！！」と、こちらの不安を、あっけなく拭い去る。話を聞くと、この国には、１２以上のマイクロコスモスがあり、ほんの数時間　車で走るだけで、気候が変わり、景色も、生き物も代わるのだと言う。山道を走る事 30 分、ゆっくり、坂を上り、我々はシティーから、５０キロ程離れた、古都、アンティグアの町に入る。四方を富士山のような山に囲まれた、コロニアル調の町並みからは、スペインが栄えた頃の重厚さと、ネイティブのインディヘナの女性が着こなす原色の織物が柔らかく溶け込み、ゴトゴト

と伝わる石畳の振動が、高ぶった気持ちを　よりリアルに刺激する。屋根瓦には、赤い穂の美しいグラスや、何時頃来たのか、カランコエなどが生え、電線には小型のチランジアが着生する。２００年程前の地震で崩れた教会や建造物も、時間の流れを、感じさせてくれる。アンティグアは、１５００ｍの標高にあり、常春の高原地帯で、１９７９年ユネスコの世界遺産として登録された。人口の３割が海外からの移住者という、グアテマラの高級住宅地でもある。そして治安も良い。この地に住むことに決めた松本の気持ちが、すぐ理解できた。それほどに、美しい町なのだ。

　さて、前置きが長くなり、ダリアが出てこない！そう、1 回目の旅は、乾期の終わり頃で、生き物は、皆寝ている冬のような季節。ジャングルもかなり落葉し、生物は、大変少ない時期で、しかも気温は、地元では夏と呼ばれるだけあり、一年で一番暑い。しかし、初めてのグアテマラはそれも去る事ながら、最高の場所であった。そんな 3 日のステイは帰国した私にリベンジを呼びかけた。

## シェフとして再び！

2001 年 9 月 9 日、旅は再び、急な展開で始まった。造園家として独立した私は、真夏の現場で土や汗と格闘していた、そんなある日、一通のメールが届いた、グアテマラのホテルでシェフを探している、日本風の料理ができれば大丈夫！旅費は出るから誰かいないか？いなければ、アキラが来い！昔とった杵柄は町場の厨房、料理は好きだが・・・、人も見つからず、無理を告げると、私に決断をせまってきた。気が付くと、松本の言葉にうまく乗せられ、二度目のグアテマラの地を踏んでいた。町場の小さなホテルをイメージしていると、行き先はガテマラシティーでは 1，2 を争うカミノレアルと言う 5 つ星のホテル。ああ・・やられた・・・日本フェアなのだとか・・・。アルカポネのようなスイス人の総料理長が、お前はどんな料理の賞を取ったのだ？などと聞いてくるから、たまったものではない。しかし、ここがグアテマラらしさか、下働きのシェフ達は皆にこやかで、明るく、どこか抜けている。私に近い人種のようで、抜けてはいるが仕事にはそれなりのプライドを持って挑む。広い、体育館みたいな厨房は、すぐに我々の遊び場のようになった。あげくに、ライバルホテルからオファーがかかる、快挙を成し遂げた。1 週間を共にした仲間と別れを惜しみつつ、ボランティアを終えると、待ちに待った、グアテマラの旅が始まった。今回は、過去の経験を生かし、色々な場所を 2 週間程のスケジュールで動く事にしていた。無論、松本もパワーアップしている、車もトヨタのピックアップトラックに変わり、懐かしいアンティグアへの道をグイグイと進む、期待の森は前回と違い、青々としている、出会いがある予感に胸を膨らませ、路上の植物に目を凝らす。パラパラとワイルドフラワーが咲いているのが解るが８０ｋｍ以上でとばす車上からでは限界がある。そのとき、一際明るく、大きな緋色の花が目に飛び込んできた！！周りのグリーンとのコントラストが美しいそれは、キョロキョロと見渡すと、



崖の上のほうにも一株、進むに連れ時々咲いている。色も濃淡があり、バリエーションがはっきり目に焼きつく、ああ・・もう駄目だ！そわそわする気持ちなど静まるわけもなく、「車とめてー！！」と叫ぶ　しかし「此処は危ない」、の一言で、却下！　　ガーン・・・である・・　「アキラ、又、きっとあるよ！」と　希望とも、無責任ともつかない慰めをいう。落胆する私を見て、明日、山へ登ろうと提案してくれた。そしてこの花こそが、ダリアである事が、翌日　解るのであった。

## サンタマリアへ　（ダリア　コッキネアとの出会い。）

アンティグアの朝は早い、家も広く大きくなり快適だ。心地よい朝の温もりを楽しんでいると、アリシアがベッドに上がり、艶やかな体を撫でるよう、催促してくる。それに気づいたルイサが、息を荒げて、私も　と上がってくる。気が付くとベッドの上は、4匹の犬に占拠され、にぎやかな一日が始まる。松本は既に洗濯を終わらせ、朝食を作り、愛妻広美ちゃんの出社に備えている。彼女は日本大使館で文化を担当し、今回の旅も彼女が発端になった。とてもステキな奥さんだ。彼女を送り出し、家の事をすませると、「サンタマリアまで、バイクで出かけよう！」と、松本が、準備を始めた。１０ｋｍ程離れたサンタマリアは標高２０００ｍ、そこには、歩いても、バスでも行ける。目の前にそびえる、アグア山の入り口の村だ。さあ、バイクの後ろにまたがり、いざ出動！！しかし急な山道を登りだすと、さすがに、年をとったバイクは辛そうに唸る。登る道々、植物が現れると、バイクを降り、歩く事にした。目にする植物は、どれも目新しいが、何処か皆、日本の園芸種の面影があり懐かしい。一つ一つ楽しんでいると、１ｍ進むのに何分もかかり、あまり植物に興味が無かった松本は、あきれた顔で、私の奇妙な行動に付き合ってくれた。マリーゴールドやヘリアンサス、ユウパトリウムなどのキク科やサルビアなどのシソ科、マメ科が圧倒的に種類も多く、クフェア、フクシア、カルセオラリア、ベコニア、トラディスカンチア、イポメア、カシア、アリストロメリアなど限が無い、蝶やハナカミキリなどの昆虫も舞い楽園である。しかし学名が解らない。ただ楽しいだけである、私だけ一人の世界にトリップしている。きっと松本には、いや、道を行き来する人たちも奇妙な光景を見ていたに違いない。そんな周りを尻目に、一株一株に、出会えた喜びを分かち合いながら、ああでもない、こうでもないとブツブツ呟き、一歩一歩進むのだ。腰が痛くなったのに気が付き、伸びをして、行く先に目をやる。あっつ！あれだ！走り寄り花の前に立つと、もう、憧れの人に会うようなドキドキした気分で、なんとも言えぬ思いである。その花は一目でダリアであることが解った、ダリア・コクシネアとの出会いだった。松本に凄い！凄い！！と興奮して大騒ぎをしている姿は、退屈な彼にも伝わったようで、苦笑しながら喜びを分かち合ってくれた。この時期はまだ、少々早いらしく、初花が、少し咲きだしたばかりで、よく見るとまだ咲いてないそれが　けっこう生えていた。しびれをきらせた松本が「帰るぞ！」と声をかけてきたとき　既に3時間以上が過ぎていた。さあ昼飯だー。

## 幻の巨大ダリア、インペリアリス

二週間の旅は、チチカステナンゴ、ナワラ、ソロラ、サンチアゴアチトランなど標高２００ｍ前後のグアテマラのハイランドを中心にアレンジされ、数百キロの道のりを、バイクの後ろにしがみつき、旅するというものであった。かなりの珍道中で、今では一番の思い出である。実は松本は、あまり車の運転が得意

ではないのだ。大きな四駆車は、神経が磨り減るらしい。しかしそのおかげで、路肩の植物は、手に取るようによく見える、特に植物が多い山間は、このお年よりのバイクは、ゆっくりになるので、なおさら良く見える。止まるのも簡単だ。ただ、頼みもしないのに止まったらどうしよう、と心配にもなる。しかし、それすら笑えてしまうような、冒険に満ちた未知への旅なのだ。期待に漏れず、未知との遭遇は続く。進むたびに、同じような植生だが、地域変異か多少姿を変え、種類も少し新しいものが混じる。サンタマリアでは見なかった、3種類のエリンジュムやフジアザミに似たアザミ、ノボタン類、小型のルピナスなど限が無い。ダリアのコクシネアも例外にもれず、ある所にはまとまって生えている。山吹色から赤まで、細めの弁から、丸弁まで、丈も、５０ｃｍから１．５ｍぐらい、生える場所により異なる。さらりと書いてしまったが、非常に美しい光景が広がり、多くの感動はその後3回、私に足を運ばせた。きっと又行くのだなー・・・と思っている。そんな旅を終え、帰国前にもう一度サンタマリアまで行ってみた。そこには、花数を増やした、コクシネアや他のワイルドフラワー達が別れを惜しむかのように咲いていた。９月３０日の事である。それから帰国後、1ヶ月ほどして事件は起こった。松本から届いたメールである。「アキラ!凄いぞ！こんな事があったなんて、今まで気がつかなかった！」驚く様子は、彼が帰国時に持ってきた写真で明らかになった、あのサンタマリアの花畑は３ｍをはるかに超えるピンクのダリアや黄色のキク科植物、赤や青の大きなサルビィアなどの、花が織り成すものであった。知らぬ間に、松本も、植物に、はまっちゃったみたいである。また、私が見たのは、余興であり、宴はその後、クライマックスへと進んでいた事を知ってしまい。私も又、深くはまり込んでいた。そのダリアはインペリアリスであることも解り、グアテマラに翌年行く事になる。

## インペリアリスに会いに。

2002 年 9 月 8 日、インペリアリスを求めグアテマラを目指した。地元の園芸の会、シルクデフロラールの誘いもあり、今年も、旅費は何とかなった、しかし、10 月末に出る予定が仕事の折り合いが付かず、早まり、インペリアリスの開花シーンに出会えるのか、不安も感じていた。しかし行くと決まれば不安をよそに、行けるだけで気持ちは舞い上がっている。今回は少し奮発して、中古カメラ屋をはしごし、カメラやレンズも仕入れ、GPS も買い、色々準備もした。やる気満々である。空港を出ると、荷物もちゃんと出てきた！幸先の良いスタートに期待も膨らむ。空港で待ち受ける笑顔を見つけ、松本との再会を分かち合う。アンティグアまでの道中、互いの積もる話を持ち出しながら、今回の旅のプランを練る。今年もダリア・コクシネアなどの花達が、私を迎えてくれる。どんどん日本の現実から、この非日常の夢の世界に気持ちがのめり込んでいく。ああ最高だ！！　翌日は早速サンタマリアに向かい、夢中でファインダーをのぞき、シャッターを切る。昨年よりパワーアップした私は更に進まない。あげくに、捕虫網を取り出し、蝶を追っかけだす始末に、またしても、苦笑する松本であった。肝心のインペリアリスはやはり咲いていない。早かった。しかし木はあるはずだ！奥に茂る植生に注意すると、なにやらウドの大木のような植物が沢山はえている。見上げると、その多くがダリア・インペリアリスであることが解り、早いものは、蕾をかなり膨らませている。これが一面に咲くのだと思うと・・・。そびえるように、上のほうから蕾をさげて雄大に茂る姿は、ただただ見ているだけで時間が過ぎていく。ああ見たい！頼むから咲いてくれ。

祈る気持ちであった。

## ついにインペリアリスに出会う

サンタマリアよりアグア山に上ったときの事である。まだ雨季は完全に終わっていないが天気も良いので、アッタクすることにした。山賊が潜む事も有ると少々脅され、金目のものは持たず、捕虫網と三角紙だけを持ち出発する。お金は、小銭以外は、靴のソールの下に挟み、バスでサンタマリアまで登ることにした。こんな奇妙な男に近づく、物好きな賊もいまい。実際、良い大人が虫取り網を持って、子供のように歩く様は、地元でも、多少　異様に見えるようだ、行き来する者は皆振り帰り、指をさす者までいる。いつもは、Hora！と挨拶してくれるのに・・・。皆、目が笑っている。私も照れ隠しに笑うしかない。朝はまだ空気も冷たく、熱いコーヒーが有り難い。少々賊に脅えながら、山に入るが、歩き、植物と出会ううちに、心配など何処かへ吹き飛んでいた。赤紫のヤコウボクの花に、黒地にメタリックな黄緑色の粉を吹いた、アゲハチョウが来ている。網を持ち、そっと近づくが、すぐに気付かれ、スーと、林道下の谷へ飛んでいってしまう。木の上からは、黄色く熟したグラナディーア（トケイソウの実）が下がり美味そうだ、長い棒で採ろうとするが届かない、しまいに棒を投げてみるが、引っかかってしまった。こんな事を繰り返し、日陰に咲くベコニアやスミレ、セリ科の植物など愛でながら登る。かなり上ったか、森が開けた。日の光が当たる所には、種類は減ったが、サルビアやキク科の植物が出てくる、ここには一株だけ、フクシアで赤とグリーンのバイカラーの花も見つけた。２６００m程の所だろうか、霜も降りる辺りなので、耐寒性の親には良さそうな、一品である。もうこの辺りでは、ダリアのコクシネアは無い、しかしインペリアリスはまだ有る。何度かＳ字に蛇行する道を進むと、カーブの先で咲くインペリアリスに出会った。少々小柄ながら、紛れも無くインペリアリスであった。その、藤色がかった上品なピンクの花は天上に咲く夢の花のように有り難かった。さらに進むと数固体咲いていたが、そのすぐ先より上でパタリと姿を消した。そして怪しい雲も出てきた、頂上は３５００m以上あり、雲のうえだ。やむをえず、下山することにした、一度雨が降ると、林道は川になると言う。しかたなく帰りは早足で降りるが、間に合わなかった。ぽつぽつと来て、やがて本降りとなり、足元を雨水が流れ出す。しまいには、本当に川のようになった。かなり濡れつつ何とかサンタマリアに帰ってきた。Ｔシャツを買い、冷えた体を温め、コーヒーをすする。何故か笑いが止まらなくなり一日の幸せを噛みしめる。ああ　ついにインペリアリスに会えたのだ･･･。その後、昨年　バイクで通った道を車でたどり、しとしと雨が降る中　谷から側道に顔を出すインペリアリスの花に、出会う事ができた。これらの道筋にも、目がなれると、沢山のインペリアリスがある事に気付く。何処でも有るとは言えないが、林縁が好きなようで、山道の路肩は格好の生息場所のようであり、この事からも、非常に見つけやすい。旅の後半は、私のもう一つの世界に移り、山を下って、ジャングルへ！夜行バスでシティーより、隣国のベリーズまで行く、カリブの海と、ユカタン半島のジャングル、遺跡の旅は、１０月４日に幕を閉じた。この旅も珍道中であり、多くの、動植物との出会い、食や文化との出会いは語れば限が無いので、この辺で。

## 再びインペリアリスを求めて

帰国後、やりのこしたグアテマラへの思いは、募るばかり、友人も増え、松本の家が、故郷のようにすら思えてくる。松本も従来の、ガイド、翻訳、通訳、家の面倒に加えて、レストラン、旅行会社の運営に乗り出し、忙しくしている。メールなど便利なものがあるので、あまり離れている気もしないが、いざ行くとなると、行き帰りの移動だけで、最低３日はかかる場所であり、気軽にとはいかない。しかし、心のアンテナはいつもビンビンに立っており、チャンスを伺っていた。２００４年１月１６日、チャンスは訪れる。１０月下旬が最高の時期であるが、仕事は曲げられない。種採りとランの開花を目的に決め、新たな良い場所を見つけた、と言う松本の誘いに身を委ねる。松本はすっかりランにはまっていた。無論、私も4歳の頃、山で春ランに出会って以来の蘭好きである。通いなれた空港はスペイン語でにぎわい、いつもと変わらぬ笑顔が出口に並ぶ、帰ってきたのだなー、胸が熱くなる瞬間だ。アンティグアへの道は、紅葉こそ無いが、日本の１１月頃のような景色だ。イネ科植物が穂を出してそよぎ、花達もまだ、名残惜しそうに咲いている。ああ間に合った、インペリアリスも立ち枯れているものもあるが、少々葉を黄色くしながらも、咲いていてくれた。まだ期待できる！あれだけの株があれば、きっとバリエーションも多いはずだ。アルバやダブル、ルブラなど、楽しいぞー。確信し窓の外に広がる世界に感謝を告げる。

## 今年もサンタマリアへ

キエリボウシインコのモンキートが朝の雄叫びをあげている、今日も上機嫌のようで、アリシア達の鳴き声や、松本、広ちゃんなど、皆の物まねを、雄叫びバージョンでやっている。少々時差ぼけか、ベッドを這い出し屋上に上がると、強い日の光と心地よい風でじきに、体内時計はグアテマラ時間になる。透き通った青空と、赤茶色の洋瓦の波に、ぽっかりと浮かぶ、幾つもの教会の尖塔から鐘の音が響き、町の切れ目の緑の先には富士山に似たアグア山やフエゴ山などの、高い山々が静かに聳える。さあ、手始めに、今日はあそこまで行こう！午前中、家の手伝いや買い物に付き合い、昼食を済ますと、サンタマリアの上り口で降ろしてもらい、適当に迎えに来てもらうことにした。喜びを分かち合う場はないが、その分どんどん自分の世界に入っていく、写真を撮り、網を振り、インペリアリスのバリエーションを探し、足早に上る、この道は野犬が多く、かなり大きいものもいる。茂みで目が合うと、ちょっと気まずい二人になってしまう。基本的には人から、さんざん叩かれているので、襲っては来ないと思うが、やはり一人だと怖い。無関心が一番、そして犬より自分が強いと信じることである。しょうがないときは、じっと睨めば、退散する。賊も居るので、人間もけして安全とは言えない、誰も居ないところに、誰か来ると一抹の不安がよぎる、そう言うときは、網を振って、ニコっと笑い、挨拶をしてやり過ごすと、向こうが、足早に去っていく事が多い。たまに親切な人がいて、蝶の事を話してくれるのだが、今ひとつ言葉が理解できないのが残念だ。こんな風に、自分の身を守り進むの

は、意外と神経を使う。色々と種子は採れた、インペリアリスも沢山の種子を付けている。しかしこの山ぐらいでは、大したバリエーションは出ないらしい、多少　弁が変わるか、微妙な濃淡しかない。唯一、丸弁の横咲きを見つけ、種子を収穫する。ダリアは開花期が長いので、花を見ながら種子を取れるのがいい。まあこの種子もヘテロで、同じ花は咲かなそうだ。しかし一日目は十分に満足できた。後日、より多くの固体を見るため、アティトラン湖やチチカステナンゴまで車で　ながしてもらうが、行く途中、一株ずつ、目を、さらにして見たつもりでも、本当に、面白くないほど変化が無い、まだコクシネアの方が、収集しがいがありそうだ。また、チチやアティトランは、既に枯野原となっていた。

## 八重咲きの白いインペリアリスは、男の約束！

高原の花を満喫すると、残る時間は蘭である。松本の手配でルイスがドライバーを勤めてくれる。ワンボックスを二人占めして、まずホンジェラスのコパン遺跡まで一日がかりのドライブが始まった。ほんとに1時間走るだけで、植生が変わる。ホンジェラスに向かい、高原を徐々に下ると、気温が上がり、空気が乾いてくる。回りも大きな木は少なくなり、葉の無い潅木やアガベ、サボテンなどが混じる、イポメアも木や蔓で花を咲かせる。更に進むと、皆、丈が短くなり、疎らになる。あまり花は無いが、イポメアやバターカップツリー、ユーホルビアで細かい白花の高生種などがこの時期、美しかった。ダリアの花には縁が無く、もしかしたら季節違いで出会えるかも・・・など考えながら、景色を楽しむ。内陸の低地をカリブ海に進むに連れ、土に湿気が戻り、木々も青くなりだす。ジャングルの始まりだ！国境まで来ると蝶が飛びキク科のオオセンダングサに似た植物など、ベリーズでも見たような花達が楽しめる。コパン遺跡は国が貧しく、整備が行き届かない分、生々しく、迫力があり、楽しい、この後サカパに向かい、市場でスイカの山に飛びつく。熱い体と喉を潤し、蘭を見ながら、グアテマラをぐるり回るのであるが、その折に、写真の固体を発見することになる、山間に突如現れたインペリアリス群は１割程が、アルバであった、そしてその翌日ダブルのアルバを発見する事になる。宝くじに当たったような・・・。ただ駆け寄りしげしげと眺めた、種子も僅かだがなんとかなった。この事件の重大さを松本に伝え、今後の可能性に花を咲かせながら、この遺伝子で将来、中南米の蘭とダリア散策の資金を作り、飛び回ろう！！と大きな、男の約束をした。　そして更なる、宝探しに夢膨らますのであった。その後２００４年 12 月、妊娠７ヶ月の妻を連れ、20 日間のグアテマラ旅行に出て、沢山のインペリアリスを見る事になるが、肥えた目を二つ増やしても、やはり変異はみつからず、変異の少なさを実感する事になる。

## 終わりに

長々と、書いてしまったが、この７年で得たものは、とても大きい。ダリアだけでも、こんなになってしまう。帰国後、種子を播種して生育を見てみると、三月に撒いて、肥培すると、早いものは２ｍ程度までなり、条件が良ければ、開花株になりそうだ。二年目には私の固体は、皆、蕾を付けるが、設備が無いので、露地では、霜との戦いになってしまう。グアテの固体は皆、我が家の条件では、１２月中旬咲きだ。今年はこの寒波で、覆いはしたものの、皆、痛んでしまった。開花に関しては、現地でも一番早い、９月中旬咲きアグア２６００ｍセレクトや、カリブ側の山間に多い１月上旬咲きセレクトも、他も、皆、一律

に１２月に咲いた。現地で感じた事だが、早く寒くなる、標高の高い場所から咲き出すようなので、短日に低温が加わり、花芽のスイッチが入るのではないかと感じている。千葉の植物園では、熱帯温室に植えたら、木がやたらに大きくなり、花は咲かないそうだ。冬越しに関しては、今年１，２月の我が家は丹沢下ろしをまともに受け、かなりの寒波にみまわれたが、黒ポットの尺鉢や７，８号鉢の転がしでも、露地で冬を越した、寒冷地でも雪の下に入れば、十分に越冬できる可能性はある、寒冷地にお住まいの方は、実験として一株、花はさておき、是非、試してもらいたい。そして、交配の問題だが、従来のダリアとは、遺伝子の数が違うため、まともには、掛からないようで、設備の有る方は倍加するなど、何かの方法で奇跡を導いて欲しい。同種を交配しようとするが元から落ちるのは何故か、と言う問題も、冬囲いなど、温・湿度の管理を整えた設備での交配に期待したい。現地ではあれだけ実るのだから、真面目にやれば問題はないはずだ、ただセルフが駄目なのかもしれない。今後の問題は、早咲きの改良であろう、また、矮化も望まれているようで、これも、実生が沢山取れれば、ボケる個体も出てくるに違いない。私も今後現地で、そのような遺伝子を探せたらと思っている。又ルブラやセルレアなどの変異も真剣に探すつもりだ。又、開花期の問題で言えば、切花などに転用して、花を星にみたて、クリスマスの花として売り込むとか、方法はいくらでもあると思う、花持ちはこの時期　良いはずだ。巨大な、見上げる生け花もユニークで、やり方次第では、とてもお洒落であろうし、ブライダルに、花だけを多用するのも、今のトレンドに合うに違いない。やさしいピンクや白の、大きく解り易い花形が今の若者に受けるのである。栄養系で、すぐに大量に増やせるので勝負も早い。以上が、私の思うところである。今後のダリアの繁栄に期待しつつ。私も３０種類程ある原種が、野辺に咲く姿を、是非とも早く見られるよう、努力をしたいと思っている。

2005 年 12 月 16 日　　田中　哲